

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成21年11月号

平成二十一年十一月一日発行 第十九巻第十一号 通巻第三二二号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



# 雁の列

高橋将夫

時空ひづみてこぼれたる露の玉  
白帝の秘蔵なりける如意宝珠  
確信の鴟の高音でありしかな  
一握の千五百粒今年米

『俳句研究』秋の号より七句

真 言 宗 総 本 山 の 龍 田 姫

蜉 蝥 の 乱 舞 に 闇 の 迫 り を り  
絆 た し か に 千 本 の 占 地 か な  
内 心 は う す 緑 な る 黒 葡 萄  
先 頭 は 自 分 と 思 ふ 踊 り の 輪  
わ か る ほ ど 分 か ら な く な る 銀 河 か な  
乱 る る も ま た 美 し き 雁 の 列

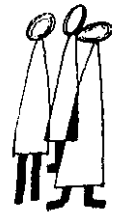
# 槐安集

水野恒彦

皆既日食蛇衣を脱ぎすてる  
炎天より戻るに一人殖えてゐる  
複眼で視てゐる少年夏燦燦  
紙魚走り出藍の夢いつかなし  
省二忌の熊野へ走る青山河

延広禎一

日蝕は宇宙の阿吽守宮出づ  
のうぜんの愛憎まんだら白壁に  
忍ぶ恋隠しなさんな浮いて来い  
金串に打たるる鱸南洲忌  
木の股に鬼の子垂るる南無三宝



加藤みき

くくられて神饌の鶏豊の秋  
桔梗や笑うてすませぬたりけり  
一抱への中抜大根なりしなり  
この家の吉祥草のひろがりやう  
白波や秋を行き交ふものこの糸

石脇みはる

放たれし牛つれ帰る夕涼し  
閑伽桶に水たつぷりとかなかなかな  
八月の童の石の佛かな  
山坂を上り下りて秋の来る  
赤芽芋提げ帰りたる葬の後

中島陽華

たもとほる夏の箸墓あたりかな  
日イ高し岩にはりつく坊主鯨  
鯛の骨しやぶりし夏の女時かな  
稲荷道抜けてかつ節冷奴  
木賊葺き傘寿の命みがきかな

竹内悦子

雨あしの強くなりたる栗の花  
日盛りの石橋に影生まれけり  
さるすべり十三日の金曜日  
数珠玉の川を浚へてをりにけり  
短夜の雑巾一枚二枚かな

栗栖恵通子

うすものや瞳に青鬼を飼うてをり  
あかがねの手桶の箔や夕焼ける  
ちんすこうほるほる夏の逝きにける  
己れ入る穴はどこやら流れ星  
秋口の人形寺の鏡かな

大島翠木

白きシャツ白く洗ひぬ河童の忌  
弟妹の忌なりき斃す大向日葵  
卒爾ながらなんばんきせるとはこれ  
月よりの風奔放の白萩に  
天狗の鼻を先立て走る山の霧

雨村敏子

梅檀の木蔭濃くなり楸郵忌

此所はだに如意樹の森の涼しけれ

真髓にも炎心にも紅蓮

吉四六さんの嘶のつづき西瓜割る

地獄極楽閻魔さん汗しとど

本多俊子

秋たつや飛鳥美人の小さき口

夕日いま折るかたちの芒かな

茄子をもぐその先にゐる山頭火

八月をつつむ風呂敷大きかり

少年の深かき一礼広島忌

小形さとる

阿修羅像枯蟪蛄の匂ひする

夏いぢげ一げ夏松よ竹よと風の吹く

前向いて後ろへさがる踊りかな

九蓋草童顔のまま老いゆくか

撫子にまた躓いてをりにけり

久津見風牛

天上の揚羽にちからなかりけり

吾れもまた壊れるひとり大根まく

生涯をターンくり返す金魚かな

はんざきに吞まれてゐるや昼寝覚

落蟬の腹に一物なかりけり

近藤きくえ

われに今日あり打水を愉しめる  
日をまとひ終の一花の蓮凜と  
秋風と覚えつ如来拜しをり  
来し方の己たしかむ盆提灯  
法師蟬ときをり下語はぶきをり

近藤喜子

秋蟬や時の欠片を拾ひたる  
迎火やたましひに添ふ木の匂ひ  
さあ一日たのむ仮面や花木槿  
流星やくつがへりたる天動説  
秋の蜂きのふの我でありにけり

谷村幸子

秋暑し雲中の間に菩薩像  
阿弥陀経となへし父の白紵  
秋冷の大樹に風のリズムあり  
ジヨギングの乙女一団竹の春  
東雲の露草の中靴ぬらす

瀬川公馨

夏空や離合集散音三つ  
晴好雨奇の雨漏茶碗夏の暮  
磯鳴のこひの干がたとなり至り  
天金の古本あつめ爆書かな  
廣重の東海道中雁渡る

# 槐市集

醍醐季世女

押車の人の摘みくるニラの花  
合ふ人に力を貰ふ今朝の秋  
暫らくは音のみ聞ゆ遠花火  
朝戸出に先づは仰ぎて醉芙蓉  
豆乳を求めて帰る今朝の秋

竹中一花

鱧祭てふ呼び方も祇園かな  
子の叩く鉦や太鼓の盆念佛  
湖近く曼陀羅に鳴く法師蟬  
帯締は琴座の色や夏惜む  
青北風や水尾の里に榊剪る

谷岡尚美

夏萩や柴折戸誰か過りたる  
鱧づくし蒔絵の椀の糝薯かな  
青大将その名のごとく前進す  
青伊吹真正面に仰ぐかな  
病む人の気丈なる笑み花芙蓉

寺田すず江

海境の渦巻いてゐる晩夏かな  
文机に淡き香りや夜の桃  
雨粒のひかりを掬ふ花芙蓉  
白帝やこの坂ひとつ越えたれば  
剥製の熊の鋭気や涼新た





# 槐集

## 高橋将夫選

揚花火海の子宮に響動<sup>と</sup>みける 守口 柳川 晋

千億の朝新しき秋ひとつ

青北風の渦や宇宙の始点より

言挙げしまま空蟬となりにける

放下して放下して芋嵐かな

短夜や探しあぐねてゐる如意樹 枚方 富松 寛子

あめんぼの軽きいのちの愉しめり

氷水うごき沈黙ほぐれけり

熱き湯に仮のいのちの髪洗ふ

草市や幽霊 飴の頬を突く

寄る波に砂よみがへる素足かな 中野 中野 京子

染め上げてゐすわる夕日夏安居

パンドラの箱の開かれ原爆忌

雨雲と峰雲空の泣き笑ひ

たたくほど胸の音色の七変化

どつどつどう風吹く岸の青胡桃 枚方 近藤 紀子

水底や一切の蟬黙しをる

欠けてゆく夏日子らの目輝きぬ

ささくれし心がメロン食べてをる

夏座敷魍魎魍魎の来てをりぬ

黄檗や猩猩蜻蛉に呼ばれ来し 京都 竹中 一花

色の無き風に染まるや野の佛

秦人の御佛の前秋気生る

白雲に遊ぶ蜻蛉や黄葉樹

人の世の濁りの川に散る花火

蚊柱の崩れかかりて立ち直る 大阪 久保東海司

風鈴の音色はかどる針仕事

形代の流れ易きはをんな文字

睡蓮の水の余白に雲を置く

朝刊を膝に黙禱 広島 忌

# 銀河往来 高橋将夫

青北風の渦や宇宙の始点より 柳川 晋  
宇宙の始まりはビックバンという大爆発。その大爆発が膨張し、  
拡散したのが現在の宇宙だとすれば、爆発の場所は無限の宇宙  
の何処だったのだろうか。青北風（あおきた）は九月から十月  
にかけて晴天の日に北から吹くかなり強い季節風。この風に乗  
るように平戸（長崎）あたりに飛魚が海を渡ってくる。そんな  
青北風に吹かれて、宇宙の始点を思う作者の発想に脱帽。他に、  
〈千億の朝新しき秋ひとつ〉の感性、〈言挙げしまま空蟬となり  
にける〉の視点にも共鳴した。

氷水うごき沈黙ほぐれけり 富松 寛子  
氷水を前に、なぜか黙りあう二人。氷が解けてコトリと動いた。  
それが合図のように、再び二人の会話が始まったというささや  
かで、ほほえましい景。切っ掛けとは、およそそんな些細なこ  
となのかもれない。

〈あめんぼの軽きいのちの愉しめり 寛子〉  
寄る波に砂よみがへる素足かな 中野 京子  
波が寄せては返す砂浜の砂を見て「砂よみがへる」と捉えた作  
者の感性に共鳴。「素足」から砂の感触が直に伝わってくる。  
〈雨雲と峰雲空の泣き笑ひ 京子〉

水底や一切の蟬黙しをる 近藤 紀子  
蟬時雨が止んであたりが静寂に包まれた。「水底や」から、そ

のしじまの深さが強烈に伝わってくる。

色の無き風に染まるや野の佛 竹中 一花  
「色無き風」は秋風。色の無い風に仏が染まるという感覚に共  
鳴した、「朱に交われれば赤くなる」という。はたして、仏も秋  
風にそまるか。

形代の流れ易きはをんな文字 久保東海司  
女文字の形代が特に流れ易いというわけではないが、そう言わ  
れてみるとそんな気がしないでもない。発想の面白さと、断定  
が心地よい。

蜉蝣の翅鎮まりぬ寺の鐘 西村 純太  
蜉蝣（かげろう）は蜻蛉のようだが、体も翅も脆弱で、尾に二、三  
本の尾毛がある。幼虫が水から出て羽化し、卵を産むと数時間  
で死ぬ。はかないものたどえに用いられる。夕闇に群がって  
水辺の空中を乱舞するが、鐘の音で鎮まった。諸行無常。

秋の蠅ひとつもぬない暮しかな 十川たかし  
昔と違って蠅はほとんど見かけなくなった。蠅取紙が懐かしく  
さえある。衛生的な生活で結構なことである。しかし、あたり  
まえのことを一句として出されると、そこに作者の屈折した思  
いを感じる。シニカル、俳諧。しかも「秋の蠅」となると、こ  
の生活、そこはかとない淋しささえ感じさせる（以下略）